

〈脱成長〉時代の児童文学 (第三回)

…… 「読書」 形態の危うさ

佐藤 宗子

大人と子どもが現実として「児童文学」を共有するような状況にある現在、両者でまったく異なることによってよいのは「読書」状況である。十代までの「子ども」読者は、媒介者たる「大人」から一様に「読書」を推進され指導される立場にある一方、「大人」読者の「読書」についてはほとんど顧みられることがない。その一方で、「読書」の対象となる「書」をめぐる環境は大きな変化の只中にある。

1

「読書」形態の危うさ」に対する問題意識がより強く刺激されたのは、二〇一四年末から一五年年始にかけてのいくつかの見聞に因る。

一つは、年末に開催され、私自身も出席していた公立図書館の協議会の場での出来事である。なぜか学校図書館や子ども読書の読書関係者や大半の委員会構成なのだが、自由な意見交換の際に、案の定、子どもたちに対する熱心

な読書推進の要望が出された後、図書館学の専門家から以下のような発言がなされた——統計上の調査からは子どもの読書は必ずしも減っておらず、むしろ本を読んでいないのは大人である、「いつも話題は子どもばかり」というのは明らかに社会のニーズと認識がずれている、子ども時代に読書習慣を付ければ大人になっても習慣が続くというの「幻想」である、と。

もう一つは、新年会の席で、出版に関する情報に接したことである。別々の出版社の刊行物の話なのだが、一月時点で刊行中／刊行予定の、作家の全集乃至全集的な叢書の発行部数が、いずれもあまりに低い数字で驚かされた。どころも著名な作家、定評ある出版社で、広く宣伝もされているものである。それでいて、最低としか思えぬ部数ですら、期待する売り上げは「図書館以外の個人の購入の伸び次第」であるという。一人の編集者はさらに、新書売り上げのきわめて厳しい状況についても教えてくれた。新刊は、